



「御国廻御行程記」山口の時鐘部分。（毛利家文庫30地誌57）

文書館

歴史ノオト

「音」で読み解く
防長の歴史

♪ 5

歴史ノオト⑤

時の鐘

【時鐘】

萩の城下に時を告げる鐘が置かれたのは貞享3年（1686）のことで、真宗寺院端坊（はしのぼう）に鐘楼堂が設置されました。徳山には、それより早く万治元年（1658）に設置されたようです。その後元禄16年（1703）には三田尻船倉に（『もりのしげり』）、正徳2年（1712）には山口の端坊に時鐘が設けられました。天保13年（1842）には、萩城下5か所（松原口・橋本橋・松本橋・中渡番所・鶴江）に時鐘が増設されました。

【萩の時鐘と鐘楼堂】

萩城下端坊に時鐘として置かれた梵鐘はその後、大正元年（1912）にいたるまで220年以上にわたって使用され、その後戦時中の供出を免れて現存しています（萩市指定文化財。コラム参照）。時鐘が吊された鐘楼堂は貞享3年、萩藩第3代藩主吉就が初入国にあたり、時鐘用として寄進建立したもので、年々現米15石を扶持して常に2名の鐘撞を置き、諸士から時鐘料を徴収しました。

建物は木造入母屋造りで、当館の絵図

によると、下層は3間四方、「鐘之段」は2間四方となっています（「端坊鐘突堂之図」毛利家文庫58絵図1083。裏面参照）。

梵鐘は青銅製で総高1.465mのかなり大きなもので、作者は藩の御細工人、鋳物師郡司喜兵衛信安。郡司一族を代表する近世の名工として知られています。

【山口の時鐘と鐘楼堂】

一方、山口の端坊に設けられた鐘楼堂は、当館の資料によると、やはり3間四方の二層瓦葺きでした（「防州吉敷郡山口端坊時鐘之覚 享保七年（写）」県史編纂所史料734）。時鐘は萩のものと同じ大きさで、やはり藩の鋳物師郡司氏が作りましたが、戦時中の供出により現存していません。

山口の時鐘は、萩藩第5代藩主吉元の帰国にあわせて始められるよう鋳造されましたが、萩で作られた鐘が「以の外おもく（もつてのほか重く）」、山口まで運ぶのに手間取って間に合わなかったため、臨時に山口常栄寺の鐘を吊って殿様の通過時分だけ対応しました。



「端坊梵鐘」（萩）

時鐘をおく鐘楼は軍事施設としての側面を持っていたため、設置には幕府の許可が必要でした。本文でふれた時鐘堂5か所の増設もなかなか幕府の許可が下りず、設置には2年近い年月がかかりました。

これらの鐘は、たとえば異国船を発見した場合などの非常時には「●●、●●、……」という「二ツ切」で打たれ、それを聞いた家臣らは登城して警衛にあたることになっていました。

山口では古くは善福寺の鐘を時鐘として利用していたことがあったようですが、その後ながく断絶していました。山口に時鐘が到着し、端坊の閑隆和尚によって撞初めが行われたのは、正徳2年（1712）7月7日のことでした。

山口に時鐘が置かれることに際しては、山口市中の多くの寺から設置の要望があったようですが、ひとつは立地条件、ひとつは萩でも真宗端坊に時鐘があったことから、山口の端坊に決まったようです。

山口端坊の時鐘は、『山口県寺院沿革史』によると、明治4年（1871）まで市中に時を告げていたようです。

【徳山の時鐘と鐘楼堂】

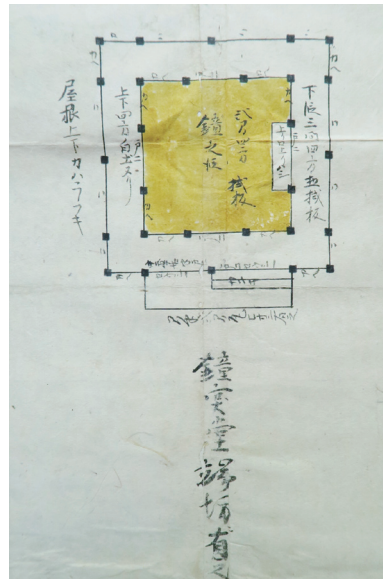
徳山藩の時鐘については、『徳山市史史料 上』第五編に載せる「藩史」の巻7に記述があります。

万治元年（1658）戊戌9月10日（一本10月）徳山時鐘成就、今日卯之刻撞初被仰付之、場所は鐘撞堂丁頭東側之裏三田川端二堂建之

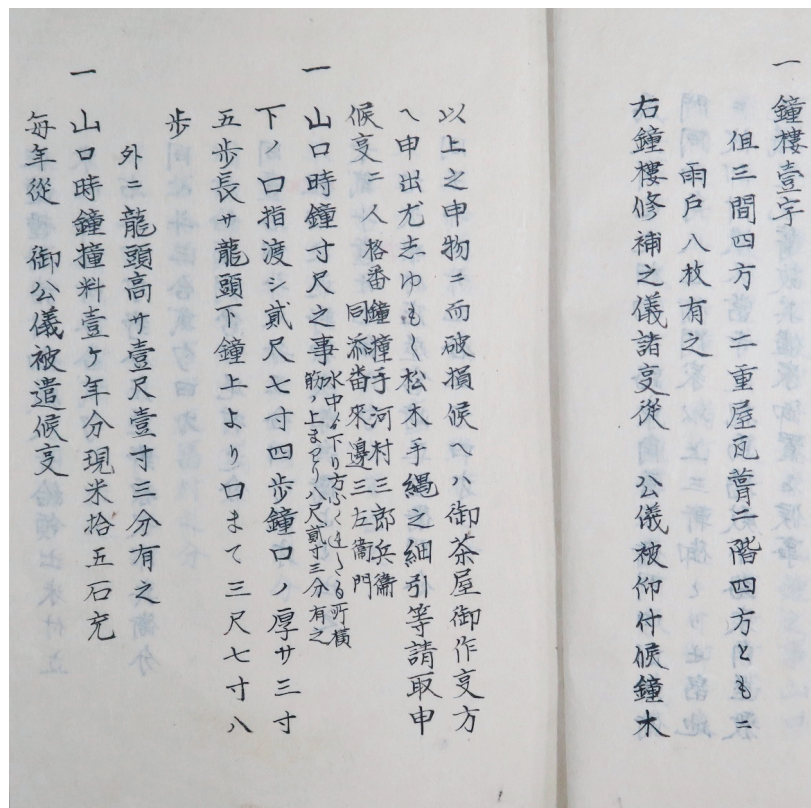
その後延宝7年（1679）・貞享4年（1687）に鋳替えられ、藩の改易・再興を経て、享保4年（1719）10月8日の子の刻に改めて撞初めが行われました。藩が中絶していた間（1716-19）、時鐘は常禱院に預け置かれていたようです。藩の再興に伴って鳴り響いた鐘の音は、文字通り徳山の人々に新たな時を告げるものでした。



萩端坊の鐘楼



（毛利家文庫58絵図1083）
「端坊鐘突堂之図」



「防州吉敷郡山口端坊時鐘之覚 享保七年（写）」
（県史編纂所史料734）

この資料は、戦前におかれた県史編纂所が昭和十五、六年頃に山口端坊の原本を謄写したものです。
山口市の安部家文書79にも同じものの写しがあります。